



フレドリック・ブラウン他
仁賀克雄編・訳

猫に関する恐怖小説



徳間書店

猫に関する恐怖小説

1980年8月31日 第一刷

〈じんか・かつお〉

昭和十一年、横浜に生まれる。県立横須賀高校を経て、早稲田大学商学部を卒業。早大在学中に江戸川乱歩を顧問にワセダミステリクラブを創立。以後、海外のミステリーとSFの紹介、翻訳に活躍している。

「火星の笛吹き」R・ブラッドベリ、「地図にない町」R・K・ディック、「幻想と怪奇①②」などの訳書の他に、「海外ミステリ入門」「放課後の殺人者」などの著作がある。

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 F・ブラウン 他

編・訳者 仁賀克雄

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(433)六二二一(代表)
振替東京四一四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買い求めの書店にてお取り替えいたします)

〈編集担当 久保寺 進〉

印刷・三晃印刷(株) 製本・大口製本印刷(株)

猫に関する恐怖小説
目次

トバーモリー

5
サキ

猫男

13
バイロン・リゲット

猫の復讐

27
ブラム・ストーカー

白い猫

39
S・ル・ファニユ

猫ざらい

51
フレドリック・ブラウン

僕の父は猫

55
ヘンリー・スレッサー

古代の魔法

63
A・ブラックウッド

帚の柄

105
W・デ・ラ・メア

灰色の猫

125

バリー・ペイン

ウルサルの猫

137

H・P・ラヴクラフト

エジプトから来た猫

141

オーガスト・ダーレス

緑の猫

151

クリーヴ・カートミル

七匹の黒猫

157

エラリー・クイーン

魔女の猫

173

ロバート・ブロック

著者謹呈

187

ルイス・パジエット

あとがき

224

カバー・扉 イラストレーション 篠田昌三
本文カット・目次 デザイン 矢島高光

トバーモリー

サキ

八月末の薄ら寒い雨あがりの午後だった。ヤマウズラは禁猟期で撃てず、いるのは冷凍庫の中だけという、あいにくの季節で、狩猟するものもなかった——プリストル海峡の北端に行けば、肥えた赤っぽいシカを追いかけても罪にはならないのだが、プレムリー夫人のハウス・パーティー会場は、あいにくプリストル海峡の北端ではなかった。従って客たちも、この午後はティー・テーブルの回りに集まっていた。季節といい、顔ぶれといい、面白味はなかったが、自動ピアノでも聞かされるのではないか、早くオークション・ブリッジをやりたいな、といったうんざりした気配も、一座の中にはつゆも感じられなかった。

一同のあからさまな関心は、コーネリアス・アビンという、あまりばつとしない人物に集まっていた。プレムリー夫人の招待客のなかで、得体の知れないのは彼ひとりだった。彼が「気の利く男」だという評判を耳にし、その才気が座持ちを良くするだろうと期待して、招待客のなかに入れたのだった。ところがティー・タイムまで、それがどんなものであるか、夫人にも見当がつかなかった。ウィットがあるわけでもなければ、クリケットのチャンピオンでもない。神秘的な魅力もなければ、素人芝居の主役でもなかった。頭は悪くとも、女性には受ける色男であれば別だが、そうでもない。

彼はただのアピンといったところで、コーネリアスなどという名前は、物々しいだけの洗礼名としか思えない。

ところがこの男、自分が世界的大発見をしたと公言し、それに比べれば、火薬や、印刷機や、蒸気機関車などの発明は、比較にもならない。科学はこの数十年間に、各方面で多大の進歩を遂げたが、自分の発見は科学的業績というより、奇跡といった方が適切であると、ぬけぬけと大法螺を吹いていた。

「お話ですと、あなたは動物に人間の言葉を教えこむ方法を発見され、うちの飼猫のトバーモリーが、最初に成功した生徒だといわれるんですな？」ウィルフレッド卿は聞いた。

「この問題について、私はすでに十七年も研究を続けてきました」アピンはいった。「成功の端緒をつかんだのはわずか八、九カ月前のことです。もちろんそれまでに何千匹という動物実験を行ないましたが、最近猫だけを使っています。人間の文明に驚くほど馴化しながらも、高度の野性を失わない、すばらしい動物です。猫の中には、時として優秀な知性を持っているのがいます。人間でも同じことがいえますが。」

一週間前にトバーモリーと知り合いましたが、一目見て、

これが特別な知能を持つへ超えている猫であることがわかりました。最近の実験はかなり成功を収めてきましたが、トバーモリーと逢って、私は目標点に達したのです」

アピンは得意気な調子を極力抑えた声で、この驚くべき発言をしめくくった。だれも「くだらん！」とはいわなかった。ただクロヴィスの唇が、短い言葉をしゃべろうとして歪んだ。おそらく、齧歯動物への不信を口にしたのだらう。

「あなたのいわれるのは」とミス・レスカーが訊いた。

「短い文章なら、しゃべったり、理解したりできるように、トバーモリーを教えこんだということですか？」

「これは、ミス・レスカー」奇跡の発見者はゆっくりと答えた。「子供、未開人種、知恵遅れの大人相手なら噛んで含めるように教えますが、高度に知能の発達した動物は、最初の取りかかりの問題さえ解決すれば、そんなに悠長な方法は必要ありません。トバーモリーはわれわれの言葉を完全に話せます」

今度はクロヴィスがはつきり「全くくだらん！」といった。ウィルフレッド卿はそれほど失礼なことではなかったが、同じように懐疑的だった。

「猫をここに連れてきて、みんなで判断したら？」ブルム

リー夫人は提案した。

ウィルフレッド卿は猫を捜しに出かけた。あとの連中は、さだめしかなりのお座敷腹話術でも見せられるのだろうと、気乗り薄に待っていた。

すぐにウィルフレッドは部屋に戻ってきた。陽灼けた顔は蒼白で、昂奮に眼はとび出している。

「おい、本当だぞ！」

そのそぶりは冗談とは思えなかった。一同は急に興味を覚えて身乗り出した。

安楽椅子にどっかり坐ると、彼はせきこんで話しはじめた。

「喫煙室で居眠りをしているトバーモリーを見つけたので、三時だからおいでと声をかけたんだ。するといつものように私に向かって眼をばちばちさせているから、『おいで、トビー。待たせるんじゃないよ』といったら、どうだろう。全く自然な声でいうじゃないか。『好きな時に行くよ』って。驚いたのなんのって！」

アピンは一同に疑惑の眼で見られたが、ウィルフレッド卿の話はたちまち信用された。驚きの声が一斉に上り、騒がしいコーラスになった。その中でアピンは沈黙したまま、この途方もない発見の最初の反応を楽しんでいた。

大騒ぎの最中に、当のトバーモリーが部屋に入ってきた。ビロードみたいな静かな足どりで、関心なさそうに、ティール・テーブルを囲んだ一同の方に歩み寄った。

みんなバツの悪い気まずさに急に黙りこくった。かなりの知能を認められた飼猫と対等に話すのは、どうにもこそばゆいものがあつた。

「ミルクを飲むかい、トバーモリー？」ブレムリー夫人は少し緊張した声でいった。

「飲んでもいいよ」とあつけらかとした返事があつた。昂奮が一座を走る。ブレムリー夫人の、皿にミルクを注ぐ手が慄えた。

「あら、ずいぶんこぼしちゃった」彼女は申し訳なさそうにいった。

「なあに、ぼくのじゅうたんじゃないからね」トバーモリーはすましていった。

みんなまた沈黙に戻った。ミス・レスカーは教区世話人らしい態度で、人間の言葉を習うのは難しいかと尋ねた。トバーモリーはじろりと彼女を見て、そつぽを向き、そんな小うるさい質問など知っているかという態度を、あらわに見せた。

「人間の知能についてはどう？」メイヴィス・ペリントン

がつまらない質問をした。

「だれの知能のことだい？」トバーモリーが冷ややかにいった。

「そう、たとえば私の」メイヴィスは苦笑した。

「そいつは答えにくい質問だな」トバーモリーはいった。その調子も態度もちっともいいにくそうではない。

「このハウス・パーティーにあんたを呼ぶかどうかという時、御主人のウィルフレッド卿は反対でね。あれほど脳みその空っぽな女もない、お客をもてなすのと、頭の弱いものの世話をするのは、全く別物だとね。奥さんがいうには、頭が悪いからこそ都合なのよ、あの女でもなけりゃ、うちのボロ車を買って取ってくれる馬鹿がいますか、だとさ。あの車にはヘンジフォスの羨望」という名がついているんだ。押しさえすれば坂道でもうまくなるからね」

プレムリー夫人はあわてて打ち消したが、今朝ほど、デヴォンシャーのお宅で使われるには最適の車ですわと、さりげなくメイヴィスに持ちかけたのは事実なので、あまり効果はなかった。

バーフィールド大佐は話題を外せようと意気こんでいった。

「馬小舎の斑猫とはいちゃついているかね？」

そういったとたん、みんながその大失策に気づいた。

「そんな話は人前でするものじゃないだろう」トバーモリーは冷たくいった。「あんたがこの家にきてからの態度を少々観察させてもらったが、あんた自身の問題に、ぼくが話を交えたら困るんじゃないのかね」

恐慌を来したのは大佐ばかりではなかった。

「コックがおまえの夕食を用意したかどうか、見に行ってきたらどうなの？」プレムリー夫人は慌てていった。トバーモリーの夕食時間までにはまだ二時間もあるのに、空とぼけていた。

「ありがたい。でもおやつを喰べたばかりでね。消化不良で死にたくはないよ」

「猫は九つも生命があるそうじゃないか」ウィルフレッド卿は真剣にいった。

「たぶんね」トバーモリーは答えた。「でも肝臓は一つきりだからね」

「アデレイドったら！」コーネット夫人はいった。「あたはこの猫を放っておいて、ゴシップを召使たちにまき散らそうというの？」

全員が恐慌におちいった。この屋敷では殆どの寢室の窓にも、幅の狭い装飾用欄干がついている。トバーモリーに

は格好の散歩道で、鳩を見張るによい場所だが——ほかに何を見ていたのかと気づくと、一同は慌てふためいた。もしもいまの調子で、あちこちに吹聴^{ふきしょう}されたら、それこそ狼狽^{うたがひ}どころの話ではなくなる。コーネット夫人は、容貌こそ遊牧民みたいだが、その割には几帳面というのがもつぱらの評判となつてゐるものの、実はその大部分を化粧台でつぶしてゐるので、大佐と同じく不安そうに見える。ミス・スクロウエンはかなりきわどい詩を書くが、その生活はまじめそのものだから、ただ苛^{いら}立たしげに振舞つていた。これは私生活と詩との差異を世間に知られたくないからだ。パーティ・ヴァン・ターンはこれ以上悪いことはできないということを、十七歳までしてきた男だが、くちなしのような蒼白な暗い顔になつた。それでもオド・フィンズベリーののように、部屋から逃げ出すというへまはやらなかった。この若い紳士は牧師になるために勉強してゐたので、他人のスキヤンダルに巻きこまれるのは耳の汚れと考へたのかも知れない。クロヴィスは一応平然としてゐたが、頭の中では、この話の口止め料として、変種のハツカネズミ一箱を、「交換販売」の代理店から取りよせるのに、どのくらい日数がかかるか計算してゐた。

このような緊迫した状況でさえも、アグネス・レスカー

は長いこと我慢してはられない性分だつた。
「私つて、どうしてこんなところに来てしまつたんでしょう？」彼女は芝居気たつぷりにいつた。

トバーモリーはすぐさま応酬した。

「昨日クロケット・ローンで、コーネット夫人に話したろう。くいものが目当てで来たのさ。プレムリー夫妻ほど退屈な連中はいないけど、コックが一流だからね。さもないけりゃだれだつて二度とこんなところに来るもんですかつていつていたろう」

「うそ、うそよ！　ねえ、コーネットさん——」狼狽したアグネスは声をはり上げた。

「コーネット夫人は、あんたのいつたことをあとでパーティ・ヴァン・ターンに告げ口したよ。『あの女はまるで欠食児童よ。一日三回の食事にありつけるなら、どこにも行くわ』つてさ。するとパーティ・ヴァン・ターンは——」

おしやべりがここで終つてさいわいだった。トバーモリーは牧師館の大きな黄色い牡猫が、藪をわけて馬小舎の方に行くのを見つけ、一瞬のうちに開いてゐるフランス窓から姿をくらました。

この頭の良すぎる生徒が見えなくなると、コーネリア

ス・アピンは猛烈な嵐の矢面に立たされた。きびしい非難と、心配な質問と、驚いた嘆願の嵐だ。こうした事態を招いた責任は彼にあった。事態の悪化を防がなければならぬ。トバーモリーはあの危険な才能を他に頼ち合うことができるだろうか？ 彼はまずその質問に答えさせられた。できるでしょうと彼は答えた。もう仲の良い馬小舎の猫にそのコツを教えたかも知れない。しかしまだ他の猫にまでは及んでいないでしょうと。

「それでは」とコーネット夫人はいった。「トバーモリーは高価な、大切なペットかも知れないけど、馬小舎の猫と一緒にすぐさま処分した方がいいわ、ねえ、アデレイド、あなたも異論はないでしょう？」

「私だってこの四半時間不愉快よ」プレムリー夫人は苦々しげにいった。「夫にも私にも大切な飼猫ですけど、こんな恐ろしいことを教えられては、もうすることはひとつしかありません。できるだけ早く殺すことです」

「夕食にいつもたべている肉片にストリキニーネを入れたらどうだ」ウィルフレッド卿はいった。「馬小舎の猫は、私が川に放りこんで溺れさす。御者はペットを失って悲しむだろうが、二匹ともひどい疥癬にかかって、犬舎にまで拡がっては大変だったからといっておこう」

「では私の大発見はどうなります！」アピンが抗議した。「長年の研究と実験の成果を——」

「実験なら農場にいる短角牛でできますよ。充分な管理下にありますからね」コーネット夫人がいった。「動物園の象だってよろしいでしょう。牛や象なら知能も高いし、寝室に忍びこんだり、椅子にもぐりこんだりすることはありませんわ」

大天使が至福千年を喜んで宣言したところ、あいにくデームズ河のボートレース日とかち合い、やむなく延期したとしても、大発見がフイになったコーネリアス・アピンほどの失望はしなかったろう。しかし世論は彼に与みさなかつた。もしこの問題について、一般の意見を聞いたとしたら、少数ながら強硬派は、アピンの食事にもストリキニーネを入れるべきだと主張、

汽車の時間に合わないことと、この事件の結着を見届けたいために、パーティはすぐには解散しなかったが、その夜の晩餐は、社交的にも不成功だった。ウィルフレッド卿は何とか馬小舎の猫をかたづけ、従って御者へのいいわけにも苦労した。アグネス・レスカーはこれ見よがしに食事制限をし、小さな乾パン一枚を、仇でも討つように嚙んでいた。一方メイヴィス・ペリントンは食事中執念深く沈黙

を守った。プレムリー夫人は座持ちのためにべらべらしゃべりながらも、関心は戸口に向けられていた。サイドボードには一見してわからないように毒を仕込んだ魚の切身が乗っているが、菓子、口直し、デザートが済んでも、トバーモリーは台所にも食堂にも姿を見せなかった。

辛気くさい晚餐ではあったが、その後の喫煙室はお通夜のようになおひどかった。晚餐では喰べたり、飲んだりして気づまりをまぎらすこともできたが、ここでは一同緊張したり、昂奮したりして、ブリッジなどを始める雰囲気ではない。オド・フィンズベリーが悲しげな声で「森の中のメリサンド」を歌っても、聴衆は一向に関心を示さず、音楽は黙殺された。十一時になると、召使はトバーモリーのために食料貯蔵室の小窓を開けておきますと行って、寢床に就いた。客たちは近刊の雑誌にかじりついていたが、だんだんとヘバドミントン・ライブラリーやパンチの合本の方に興味が移った。プレムリー夫人は時々食料貯蔵室を覗きに行ったが、そのたびにがっかりした表情で戻ってくるから、だれもが口先まで出かかった質問をおさえた。

午前二時になって、クロヴィスは沈黙を破った。

「もう今夜は戻らんでしょう。いまごろはこの地の新聞社で、回想録の第一回目を口述しているのかも知れませんが、

何とか夫人の告白などの比ではありませんぞ。当日の大見出しになりますな」

そういつてみんなの肝を冷やすと、クロヴィスは寢室へ行った。長いこと間をおいて、みんな三々五々彼にならった。

翌朝早く、お茶を配った召使は、みんなに同じことを訊かれて、同じ返事を繰り返した。トバーモリーは遂に戻らなかった。

朝食は夕食よりも不愉快な雰囲気だったが、終る前にそれは一変した。トバーモリーの死骸が藪の中から持ちこまれたからだ。庭師が発見したのだ。咽喉を噛み切れ、爪には黄色い毛が付着していた。牧師館の大きな牡猫と喧嘩して敵わず殺されたのだ。

昼までには殆どの客は邸を辞した。昼食後プレムリー夫人は元通り元氣になり、大事な猫を殺されたことで、牧師館に激越な手紙を書いた。

トバーモリーはアピンの成功した唯一の生徒であって、その後を継ぐものはいなかった。数週間後、ドレスデン動物園で象が何の前触れもなく暴れ出し、檻を破って、からかっていたイギリス人を殺した。被害者の姓名は、オピンとかエペリンとか、色々な姓で報じられたが、名前の方は

コーネリアスと正確に記されていた。

「彼が気の毒な象に、ドイツ語の不規則動詞でも教えこも

うとしていたのなら、当然のむくいさ」とクロヴィスはいった。

猫男

バイロン・リゲット

本来の名称は「タオ環礁」といい、地図ではまだこの名が使われている。しかし猫男がツアモツに移った後、そこは「猫島」と呼ばれた。そしてその名称によって一躍有名になった。

猫島は、ブカブカ島の北西七十マイルの海域に横たわる三日月形の小環礁である。昔から島民の記憶にあるように、その島はポリネシア人にとってはタブーになっていた。世界中の金を集めても、そこに行こうという者はなかったろう。そこに魔法がかかっているという現地人の迷信が何であるかは知らない。しかしそこが今日もタブーである理由はだれもが知っている。いまは——白人もポリネシア人も

——だれも訪れる人もない。そのタブーをあえて犯す者はいない。

私は猫男と初めて逢った日のことをいまでも憶えている。第二次大戦中、私は島嶼間に郵便船を走らせ、気楽に生きてきた。郵便事業はそれほど金になるものではない。しかし品物の運搬を割のよい料率で引受けたら、時には船ごとのチャーターの仕事にも応じていた。

私がいつものようにパペーテの中華料理店で坐っているところに、現地人のタクシー運転手が、その小男の紳士を逢わせに連れてきた。

私は初対面で彼が気に入った。彼は小柄で、干涸びた五

十すぎの男だった。青白い眼をし、頭はすばらしい白髪だった。灰色のリンネルの上衣を着て杖を持ち、軽いリューマチでびっこをひいているのが目についた。その顔は人の良さと知性を備えている。

運転手が私を指さすと、彼は足をひきずってこちらにやってくる。私をやっと見つけた安堵感が顔に溢れていた。

「ロジャー船長ですね？」彼は尋ねた。

「そうですが」私はそういうと立ち上った。「どんな御用ですか？」

小男は私の勧めた空椅子に腰かけた。両手を杖にもたせて、私を真剣な緊張したまなざしで見つめた。

「あなたの船をチャーターしたいのですが」

彼の態度と洋服の仕立て具合から、金の匂いがぶんぶんとした。本能的に私は商売気を出した態度に変わっていた。

「私の船はスループ（一本マストの帆船）ですが、現在のところは仕事を請負っていません。何を運ぶのですか？」

彼は私の売り込みには気づいていたようだが、そんなことはおくびにも出さなかった。

「私の名はフォスターといいます、船長。ジェラルド・W・フォスターです」彼はいった。そして私がその名を思い出すのを待っているかのように一息入れた。私が気づか

ないと知ると、彼は言葉を続けた。「私は作家です。あなたの船をチャーターして、タオ環礁に行ってみたいのです」

「タオ環礁に？」私は思わず口走った。「いったいあんなところに何のために？ 椰子と鼠だけの島ですよ」

男はへこたれなかった。「ええ、わかってます、船長。

私はあの島を買い取ったんです。そして——」

「買い取った？」私は信じがたい気持ちでいった。

小男は苛立ちはじめた。私は突然彼の夢の中に足を踏みこんだ気がした。

「船長、私はこの問題で別にアドヴァイスを求めているわけではありません。地方政府からあの島の二十五年間の賃賃権を取得しただけです。あそこで余生を送りたいと思ひましてね。島のことはすっかり調べ上げてあります」

そのことでやっと彼の正体がわかった。フランス信託領オセアニアには、彼のような連中がかなりやってくる。その眼には同じような光が宿っている。その中には作家もいれば、画家もいる。文明社会から逃れてきた者もいる。原始の島への憧れ——フランス人のきまり文句だ。

小さな紳士は説明を続けた。私のスループで島まで連れて行ってもらえれば、あとは自分でやる。荷物も運んでも